

Y13b **サイエンス・コミュニケーションの新展開・文理融合的アプローチ ～ 「歴史学・民俗学×天文学」からの試み**

稲見華恵（総研大・宇宙科学）、松岡葉月（総研大・日本歴史研究）、川越至桜、日下部展彦、小池一隆（総研大・天文科学）、立田委久子（総研大・生命共生体進化学）

科学者による科学に興味のある人へのサイエンス・コミュニケーション、それは科学に興味のある一般の人たちの知識を更に深めるために、とても有効な手法のひとつである。しかし、科学に興味のない人々には、どのようにして科学の面白さを伝えるのか、どのようにして少しでも興味をもたせるのか、その手段として文理融合的アプローチから「最先端科学と社会の接合」をテーマに研究を進めてきた。理科離れと言われている現代社会において、これは重要なテーマであると言える。

我々は、科学には直接興味がない人にも、科学に関心をもつ人にも、身近にあると感じやすいものからみた科学を中心に、文理融合の視点からサイエンス・コミュニケーションの枠を広げようと試みた。この手法により、科学との距離感を縮め、または面白さを再認識できる、新たな手立てを開発した。そのうちのひとつとして、「歴史・民俗学と天文学の融合」を目指し、歴史上での天文学の遷移や、それぞれの時代において宇宙は民衆にとってどのようなものであったのか、などを中心に一般人との双方向のサイエンス・コミュニケーションを行った。その際に、この手法の有効性を検証するためにアンケート調査も行った。本年会では、この手法についての紹介、およびアンケート結果に基づいて、新しいサイエンス・コミュニケーションの手立てについて議論する。